



Title	シロ リス太郎
Author(s)	ヴァルマー, マハーデーヴィー; 長崎, 広子
Citation	印度民俗研究 別巻. 2020, 6, p. 29-37
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/78714
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

シロ リス太郎

マハーデーヴィー・ヴァルマー

長崎 広子 訳・注



シロ

シロは妹の家で飼われていた牝牛の子で、思春期に達した雌の子牛だった。とても可愛がられて大切に育てられたので、ほかの子牛とは少し違っていた。

ある日妹が言った。

「お姉さんはこんなに動物や鳥を飼っているのに、どうして牝牛を飼わないの。役に立つわよ」

実際に、妹のシャーマーは私よりもずっと世事に長けており、小さい頃から勤勉さと賢いふるまいにおいて、特に私との比較で、称賛的だった。

シャーマーが自信たっぷり何か言っていると、彼女の考えは、流行り病のように、聞き手に瞬く間に伝染する。有用性に関するその日の彼女のお言葉が私に影響を与えて、すぐさまその提案が結果につながったとしても、驚くべきことではない。

そもそも私は食糧問題を解決するために動物や鳥を飼うのは、まったく好きではなかった。山羊、雄鶏、魚などを飼う根本的な目的を考えると、心が抵抗しはじめる。しかしその日の私は注意深くシロを見た。頑丈でしなやかな足、がっしりとした腰、つやつやした背中、長くて恰好のよい首、生えかかった小さな角、赤みを帯びた蓮の半開きの花弁のような耳、長くて先端には黒い毛の詰まった払子を思い起こさせる尻尾。何もかも見惚れてしまう姿だった。イタリアン・マールに刻まれた牝牛が、磨き上げられたかのような姿だった。健康な動物の毛並みの白さには際立つ光沢がある。シロの輝きを見ると、光が当たった部分は特にきらきらするので、まるでその毛に雲母の粉が塗られているかのように思われるのだった。

シロを見たとき、戸惑いは、決心に変わった。

牝牛が我が家にやって来ると、知人や付き人たちの間に崇敬の念のようなものが沸き起こった。シロは、赤や白の薔薇の花環をかけられ、サフラン色と赤色の大きな額の印を付けられ、バターオイルを入れた灯心の燃える四面灯火で献火が捧げられ、ヨーグルトと菓子を食べさせられた。名は白色つまりシロと付けられた。この礼拝儀礼がどんな影響を与えたのかは分らないが、シロはとても嬉しそうに見えた。その大きなピカピカ光る黒い目に献火の油皿の炎が映りこんでキラキラした時、油皿が旋回した。それはまるで、夜に黒く見える波のうねに、誰かがいくつも灯火を流したかのようなだった。

シロは本当にとっても綺麗な子だった。特に黒い水晶玉の目が潤んだその美しさには、うっとりさせられた。広い光った額、長くて形の良い顔の上でその目は、雪の中で青い水をたたえる池のように見えた。ある独特の安心した眼差しが浮かんでいた。牝牛の目には鹿のように怯えて驚いた様子はなく、人懐っこい安心しきった眼差しがあった。その動物は人間から苦痛だけでなく残酷な死を与えられることになるのだが、目に浮かぶ安心感が驚きや恐怖にとってかわられることはなかった。マハートマー・ガンディーは「牝牛は慈悲の詩である」とどうして言ったのか、それはシロの目を見ると得心が行く。

シロの緩慢なもののとした動きと比するものは少ない。素早い動きには魅力があるが、それが緩やかな動きのもつ優美さを獲得することはない。矢の素早い動きは一瞬の間、目を驚かせるが、ゆったりとしたそよ風によって花が茎の上でそとと揺れるさまは、まさに眼福だ。

数日でシロは皆とても仲良くなり、ほかの動物や鳥は自分たちの体格に

違いがあることを忘れるほどであった。犬や猫たちはシロの腹の下や足の間で遊び、鳥は背中や額に乗って耳や目をくすぐりだした。シロもじつと立って目をつむり、まるで彼らと触れ合う喜びに浸っているかのようにだった。

私たち全員を、シロは声だけでなく、足音でも認識するようになった。時間の感覚がとても鋭くて、車が門に入ったとたんモーモーと鳴き声で私たちを呼びはじめた。お茶や朝食、食事の時刻もよく分かっており、しばらく何かもらえるものと待ったのち、ムオームオーと大騒ぎするのだった。

シロは私たちに親近感や人間の愛情のような親しさを求めた。近づくとも撫でてもらうために首を伸ばす。手でさすると、安心しきった表情で顔を肩の上のせて目をつむった。離れようとする、首を回して見つづける。必要に応じてシロにはたったひとつの鳴き声しかなかったが、嬉しき、悲しみ、憂い、不安などの様々な感情の起伏がその大きな黒い目に映しだされるのであった。

一年が過ぎたころ、シロは元気で美しい子牛の母になった。子牛は赤い色のため、赤土の人形のように見えた。その額には葉っぱの形の白いティラクが、四本の足には蹄の上に白い輪があり、それはまるで赤土でできた子牛の像が銀の装身具で飾られているかのようにだった。名は赤い^{パール}宝石^{マニ}と付けられたが、みんなはアカの名で呼ぶようになった。母と息子の二頭がいっしょにいると、雪のかたまりと燃え盛る炎を想起させた。

今では我が家で牛乳の大祭がはじまった。シロが朝晩十二キロも乳を出すので、アカのために何キロが残しておいても、近所の子供から犬や猫に至るまですべてのものが「浴びるほどの牛乳」のご利益に与るようになったのだ。犬や猫は不思議な光景を見せるようになった。乳しぼりの時に皆がシロの前に一

列になって座り込み、料理人「は犬猫の前にきちんと食事の皿を置くと、特別な行事に呼ばれた客のように、極めてかしこまった様子で待ちつづけた。それから計量してすべての器に牛乳が配られ、それを飲んだ後、皆はもう一度自分の鳴き声で礼を言うように、シロの周りを飛び跳ねるのだった。すべてのものが去るまで、シロは満足した眼差しで皆を見つづけた。彼らがなかなか来ない日には、モーモーと鳴いて呼んでいるようだった。

しかし今度は、乳しぼりの問題に何らかの恒久的な解決方法をみつけないばならなくなった。使用人たちのなかで都会出身の者は乳しぼりの仕方を知らないし、村から来た者は練習していないので、何時間もおかるほどの仕事を忘れていた。シロが乳を出す前は牛飼いが我が家に牛乳を配達に来ていた。その牛飼いがこの仕事に自分を雇うように熱心に頼んできた時、乳しぼり問題は解決した。

二、三カ月が過ぎたころ、シロは餌をほとんど食べなくなり、どんどん痩せて弱りだした。心配になって、獣医を呼んで診てもらった。何日間かいろいろ診察し、検査し、レントゲンなどによって病気の原因を探りつづけた。最終的に下された診断は、牝牛は針を食べさせられ、その針が血液とともに流れて心臓に達した。針が心臓を突き抜けると、血が巡らなくなり確実に死に至る、というものだった。

苦痛と驚きのふたつの感情が心に沸き起こった。針を食べさせられるとはいったいどういうことなのか？餌は自分たちで管理していたが、その中に針が混入した可能性はある。しかし医者の方で分かったことには、餌といっしょに食べた針は口に刺さってとどまる。粗糖の大きな塊の中に埋め込まれた針

は喉の下に落ち、最終的に血液とともに循環し心臓に到達する、ということだった。

私には想像すらできなかった残酷な事実が最後に明らかになった。たいてい牛飼いは、多くの牛乳を購入していた顧客の家で牝牛が飼われることを嫌う。すきを見て粗糖に忍ばせた針を食べさせ、時ならぬ時に死に至らしめるのだった。牝牛が死ぬと、それらの家に再び牛乳を配達するようになる。針のことが知られるや否や、牛飼いはある種の雲隠れ状態となり、そのため疑いが確信に変わるのは当然のことだった。そもそも牛飼いが逃げなくても、法的措置を講じるために必要な証拠を集めるのは不可能だった。

その時からシロの死への闘いがはじまった。それを思い出すだけでも、未だに心が痛む。牝牛にリンゴ汁を飲ませれば針にカルシウムが付着して刺さらない可能性がある、と、医者は言った。そこで、毎日何キロもリンゴの汁を絞り、管でシロに飲ませた。栄養をつけるため、何度も何度も注射がうたれた。動物の注射には大きな棒のようなくとも長く太いシリンジと大きなボトルいっぱい薬が必要である。そのため、注射もそれ自体が外科手術のような痛みを伴うものだった。しかしシロはともせず、身体の中と外、両方の刺痛に耐えていた。ただ時折シロの美しいけれども悲しげな両目の端に、ふた粒の涙が浮かぶだけだった。

もうシロは起き上がることもできなかったが、私が近寄るとすぐに、目に嬉しそうな表情を浮かべた。そばに行つて座ると、私の肩に顔を置いて、ザラザラした舌で首を舐めはじめた。

アカは可哀そうに、母の病と迫りくる死に気づいていなかった。アカには別の牝牛の乳が飲まされたが、好まなかった。母の乳を飲み、母と遊びたかった

ので、機会をうかがつてシロのそばに来たり、頭で突いて起こそうとしたり、いっしょに遊ぼうと周囲を跳ね回りつづけた。

私は多くの生き物を飼ってきたので、それらのなかには天寿を全うするものもいれば、突然別れなければならぬものもいた。しかしこんなに胸を引き裂かれそうないい思い出はない。こんなに頑丈で綺麗で乳のように白く、ふんだんに乳を出した牝牛が、こんなに綺麗でいたずらな子牛を残して間もなく死んで動かなくなってしまうかと思うと涙があふれた。

ラクナウやカーンプルなどの町からも動物の専門医を呼び、地元の獣医も一日に数回往診に来たが、希望の光が見えるような治療法を誰も言わなかった。何もできずに死を待つとはどういうことなのか、不治の病を患った瀕死の病人のそばに座りつづけた者だけが知っている。

シロの美しいピカピカ光る目が輝きを失い、リンゴの搾り汁も喉につかえるようになると、最期の時が来たことを察した。もう願うことといえば、シロが死ぬ時にそばにいたいということだけだった。昼間に限らず夜にも何度も起きてはシロを見に行った。

ついにある日の明け方の四時のことだった。様子を見に行くと、シロは自分の顔をいつものように私の肩に置いたとたん、石のように重くなって私の腕から滑り落ち地面に倒れた。おそらく針は心臓を突き抜けてその動きを止めてしまったのだらう。

自分が飼った動物の亡骸はガンジス河に流すことにしていた。シロを運ぶ時、悲しみが海のように押し寄せてきたが、アカはこれも遊びだと思って飛び跳ねつづけた。

もしも深い溜息を言葉に訳すことができるなら、それはこだまして響き渡

ることだろう。

—— 嗚呼これが、牝牛の保護国なのか²！

(原題 गोरागाय)

¹ 原文は mahadeva で、家庭で雇われたバラモンの料理人を指すことを Ved Prakash Singh 氏より¹ 教示いただいた。この場を借りてお礼申し上げます。

² ヒンドゥー教で牝牛は神聖な生き物とされ崇敬の対象である。牛肉は食用にされないため、インドは牝牛の保護国ともいわれる。しかし著者は、牛飼いが牝牛を苦しめ死に至らしめたことに激しく落胆し अहं मे गोपालकं² 「ああ、我が牛飼いの国よ」と皮肉をこめて嘆いている。



リス太郎

今日イエロージャスマンが蕾をつけた。これを見ると思わず、この蔓の生い茂った緑に隠れて座り、私が近づくとサツと肩に飛び乗って驚かせた、あの小さな生きものを思い出す。あの時の私は蕾を探していたが、今日はあの小さな命を探している。

しかしあの子はもうすでにこのイエロージャスマンの根元で土に帰っていることだろう。金色の蕾に姿を変えて、私をびつくりさせるために、地上に現れたかもしれないと誰が知るだろうか。

ある日の早朝、部屋からベランダに出ると、二羽のカラスが植木鉢の周りでくちばしで鬼ごっこのように遊ぶのが突然に目に入った。このカラス天狗も不思議な鳥だ。敬われつつ軽蔑され、尊重されつつ忌み嫌われている。私たちの哀れな先祖さまは、大鷲や孔雀や白鳥の姿で現れるわけではない。先祖供養の半月（アーシユヴィン月黒分）に、私たちのところに何かをもらいにカラスの姿で降臨しなければならない。そればかりか、遠方の親しい人たちにも、先祖の到来という甘美な知らせを、その耳障りな鳴き声で知らせなければならないのだ。それなのに私たちは、カラスとそのカーカーという鳴き声を侮蔑の意味で使っている。

カラスの縁起譚の私の考察が突然中断した。というのも、植木鉢と壁の間に隠れた小さな生き物に視線が止まったからだ。近づいてみるとリスの小さな子供で、おそらく巣から落ちたのだろう。今やカラスは恰好の餌食を見つけたのだった。

二羽のカラスのくちばしによって付けられたふたつの傷は、その小動物には極めて重いものだったので、リスはじつと植木鉢にひついて倒れていた。

カラスのくちばしで傷つけられると助からない、だからこのまま放っておくしかない、と誰もが言った。しかし私は納得できず、子リスをそっと持ち上げ、自分の部屋に連れてきて、綿で血を拭き取り、ペニシリンの軟膏を塗った。綿で細いこよりを作って牛乳に浸し、やっこのことでその小さな口に付けてみたが、口は開かず、牛乳のしずくが両わきに零れ落ちた。

何時間も手当を試みたのち、その口に一滴の水をたらすことができた。三日目になると私の指をその小さな前脚で掴んで青いピー玉みたいな目であちこち見るようになるほど、とても元気になり、落ち着いた。三、四カ月後には、そのつやつやした毛、房の付いたしっぽ、くりくり動くピカピカの目で、みんなを驚かせるようになった。

私たちは動物名を呼称とし、こうしてリス太郎と呼びはじめた。

私は花を入れる軽いかごに綿をしきつめ、紐で窓にぶら下げた。それは二年間リス太郎の家になった。リス太郎は、自分で揺らして、その家で揺れつづけた。ピー玉みたいな目で部屋の中と窓の外を見て何を感じていたのかは分からない。しかしその賢さと活発さには誰もが目を見張った。私が書きものにむかうと、自分の方に私の気を引こうと強く思い、リス太郎は良い方法をあみ出した。私の足元に来て、きつとカーテンまでのぼり、同じ素早さで降りた。この旋回運動は、リス太郎を捕まえようと私が立ち上がるまで続いた。ある時は、リス太郎を捕まえて長い封筒に入れると、その前脚と頭以外のすべての小さな身体が封筒の中にすっぽりとおさまった。その奇妙な態勢で、時には何時間も机の上で壁を支えに立って、ピカピカ光る目で私の仕事を見つめ

ていたこともあった。

おなかが減るとチツチツと音を鳴らして私に知らせ、カシユーナツツやビスケットをもらい、同じ姿勢で封筒の外に出た前脚で掴んでかじりつづけた。

そしてリス太郎の人生で初めての春が訪れた。センダンやジャスミンの香りが私の部屋にそっと広がりはじめた。戸外のリスたちが窓の網戸のそばにやってきて、一体全体チツチツと何のおしゃべりをしたのだろうか。リス太郎が網戸のそばに座って懐かしそうに外を覗いているのを見て、私はこの子を自由にやらなければならないと思った。留め金を外して網戸の片側を開けた。そしてそこを通過してリス太郎は外に出ると、本当に自由の息を吸った。こんなに小さな動物を家飼いの犬や猫から守るのも、難しい問題ではあった。大切な書類や手紙があったので、私が出かけると部屋は閉められていた。だが大学から戻って部屋を開けて足を踏み入れたとたん、リス太郎は網戸の通路から中に入ってきて、私の足から頭まで、また頭から足まで駆け巡りはじめたのだった。その時からこれが日課となった。私が部屋から出ると、リス太郎も窓の開いた網戸を通過して外に出ていった。そして一日中リスの群れの大將になってすべての枝の上でずっと飛び跳ねていた。そしてぴったり四時になると窓から中に入ってきて、自分のブランコで揺れるのだった。

一体いつから、またどうして、私を驚かせようと思うようになったのだろうか。ある時は花壇の花の中に、ある時はカーテンのひだの間に、またある時はジャスミンの葉の中に隠れた。

うちではたくさん動物や鳥を飼っていて私によくついていた。しかしそれらの中に私といっしょに私の皿から食事をしようなどと度胸のあるものがあった記憶はない。リス太郎はその中で例外だった。私が食堂に着くとすぐに、

窓から出て中庭の壁とベランダを通過してテーブルの上に駆け寄り、私の皿に座ろうとした。私は苦勞の末、リス太郎に皿のそばに座ることをしづけた。そこに座って、私の皿からひと粒ずつご飯を取って、きれいに食べつづけた。カシユーナツツがリス太郎の好物だった。何日間かカシユーナツツをもらえないと、他の餌を食べなかったり、ブランコから下に放り出したりするのだった。

その頃、私は交通事故で怪我をして数日間入院することになった。その間、私の部屋が開くとリス太郎はブランコから降りて駆け寄り、他の人だと思えると、踵を返して自分のねぐらに戻っていった。

皆はリス太郎にカシユーナツツを与えていたが、私が退院してブランコの掃除をする、中はカシユーナツツだらけだった。ということは、私の入院中にリス太郎は自分の好物をほんの少ししか食べなかったことになる。

私の体調がすぐれない時には枕元に座って小さな前脚で私の頭と髪をとてもゆっくりとなでつづけたので、リス太郎がそこを離れると、看護師がいなくなったかのように感じた。

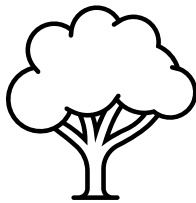
夏の昼間に仕事をしていると、リス太郎は外に出ずブランコにも乗らなかった。私のそばにいながらにして暑さを避ける全く新しい方法をあみ出したのだった。傍らに置かれた素焼きの水甕の上で寝そべり、こうして私の近くにいながら涼むこともできた。

リスが二年以上生きることはない。リス太郎の人生の旅も終わりをむかえようとしていた。一日中何も食べず、外にも出なかった。夜になると最期の苦しい時でさえも、リス太郎はブランコから降りて私のベッドにやってくると、冷たい前脚で、子供の頃に瀕死の状態で掴んだ私のあの指を掴み、手にひっついてきた。前脚があまりにも冷たかったので、私は起き上がってヒーターをつ

け、リス太郎を温めようとした。しかし朝の最初の光がさすと同時に、また別の生で目覚めるために、リス太郎は眠りについた。

ブランコは降ろされ、窓の網戸は閉められた。しかしリスたちの新たな世代は生まれ網戸のむこうでチツチツと戯れ、そしてイエロージャスマンに春は再び訪れる。ジャスマンの蔓の下にリス太郎は埋められている。それはリス太郎がその蔓を一番好きだったからでもあるが、あの小さな身体が春のある日にジャスマンの黄色がかった小さな花になって咲くのだと信じることは、私を満足させてくれるからでもあった。

(原題 *Spring*)



使用テキスト

Mahādevī Varmā, *Merā parivār*. Allahabad: Lokbhārti Prakāśan, 1986

解説

マハーデーヴィー・ヴァルマー（一九〇七―八七）は、アラ―ハーバードで女学校の校長を勤めながら、現代ヒンディー文学史にその名を刻まれるチャールワード（陰影主義）を代表する女流詩人でもあった。彼女の才能は詩作にとどまらず、画家や随筆家としても感性豊かな作品を残している。日本でも紹介される機会の多いヒンディー詩人である。随筆の日本語翻訳には、松木園久子訳・注「マハーデーヴィー・ヴァルマー作「思い出の一シーン」及び「記憶の糸」より」、印度民俗研究第九号（一九九五）がある。

本編は彼女の随筆集『私の家族』(*Merā parivār*)からふたつの小品を翻訳した。この随筆集（初版年は不明であるが、本人の前書きは一九七二年）は、彼女が飼っていた動物たちを描いたものである。日本には動物を飼い、その絆やそれを亡くす悲しみを表現した文学は数多くあるが、「ペット」として動物を飼うことが一般的でなかった当時のインドで、作品を通して窺われる動物たちに向けられた優しい愛情表現は、普遍的なものであり、時代を先取りしていたともいえる。「ペットロス」という言葉が一般的になった今日の方が作品に共感する読者は多いことだろう。

この随筆集のタイトルが示すように、「ペットを「私の家族」とよび、動物たちとの別れは彼女にとって身内を失う辛さと同じである。別れる悲しみに耐えられなければ、動物を飼うこと自体を躊躇することもあるが、マハーデー

ヴィー・ヴァルマーが数多くの動物を飼っていたを見ると、彼女にそれは当てはまらない。むしろ、楽しい時や輝きが永遠に続くことはなく、かならず終わりがあるからこそ、美しいと考えていたのではなからうか。詩「権利」(*अधिकार*)の中で、輝きを失わない満天の星はない、枯れることのない花などない、と美しいものには命の限界があることを述べたのち、永遠の命を与えてくれる神を拒む次の一節は、マハーデーヴィー・ヴァルマーならではの「生の礼賛」と解釈されよう。

あなたの世界

痛みはない

悲しみはない

燃えつきることはない

朽ちる ものの哀れを 知ることはない

不死の世界を得られるのですか

あなたの慈悲のお陰で

どうかやめてください、神さま！

朽ち果てる権利は わたしのものです

(*अधिकार*より)